

I 部

紅花編





紅花の学名は「カルタムス・ティンクトリウス」。日本に入ってきた紅花のルーツとされる「カルタムス・パレスチヌス」という野生種は、イスラエル付近に分布しています。

室町時代以前に山形に伝わり、山形の気候風土に合った紅花に育っていきました。

山形県では、江戸時代に紅花が盛んに栽培され、繁栄を極めました。

「もがみべにばな」のDNAを分析すると朝鮮半島の系統に近いという結果が！

# 01 いざなう

どこで生まれ、なぜ日本に？  
世界を旅した紅花の浪漫を探る。

## 紅花の種類

世界には約25系統の紅花があります。東南アジアでは1株から100個以上花が咲く品種もあります。紅花の形態的な特徴として、葉の縁に鋭いトゲのある剣葉種とトゲのない丸葉種があり、現在では染色用には剣葉種、切り花用として丸葉種が多く栽培されています。



### もがみべにばな

昭和43年、山形県立農業試験場（現：山形県農業総合研究センター）で、出羽在来中生種の中から系統を分離させた「剣葉種」。分枝数、着花数ともに多く、花は大きめです。花色は開花始めが黄色で、その後、花筒部から紅色に変化していきます。花びらが長いのも特徴。

## 紅花の種類



### とげなしべにばな

出羽在来種から選抜した、トゲのない「丸葉種」です。「もがみべにばな」と比べて草丈が低くて茎が太く、濃い葉色が特徴。蕾の数は少ないですが、花は大きめ。他品種よりも約1週間早く花を咲かせます。

### しろべにばな

出羽在来種の突然変異から生まれた「剣葉種」。花はクリームがかった白色で、開花時期は「もがみべにばな」よりもやや遅め。最近、登録された品種には、「<sup>しぶん</sup>絲粉」「<sup>しふん</sup>二段花笠」「<sup>あさひはなかさ</sup>黄金花笠」「旭花笠」があります。



### 紅花油用品種の種子

他の紅花に比べて、種子のサイズが大きく、種子中の油脂含有率が高い品種。品種改良によって作られたもの。

## 紅花の構造



断面

### 紅花の特徴

紅花はキク科の仲間です。山形では7月上旬～下旬に開花します。開花するためには「高温長日」が好条件。特に温度の影響は大きく、生育に適した温度の範囲では日照時間が長ければ長いほど生育が早まります。開花までの有効積算温度<sup>\*</sup>は620℃前後です。

<sup>\*</sup>有効積算温度  
日平均気温から成長下限温度(10℃)を差し引いて加算したものの。

## 紅花の構造

### 紅花の形態的・生理的特徴

**花**  
Flower

花びらのように見える1本1本が「花」。紅花は、これらの小さな花が集まって咲く「頭状花」です。キク科の花(ヒマワリ、タンポポ、アザミ)はいずれも同じ構造です。



**総包**  
Involucre



花を包み込む包葉は、生育の途中で花全体を保護する役目があります。これら複数の包葉のことを総包<sup>ほうよう</sup>と言います。剣葉種の包葉は成長するにつれて鋭いトゲが出てきます。

**葉**  
Leaf

剣葉種の葉縁には細かいトゲがあり、トゲの鋭さは品種によって異なります。葉は茎に対し、144度の角度で回転するように広がっています。



### 紅花ミニ知識

紅花の花びらが初めて薬として書物に登場したのは、中国・宋の『開宝本草』(973年)。古くから紅花は、人々の暮らしの中で、尊ばれてきたようです。中国・明の医師で本草学者でもある李時珍が残した中国の薬物書『本草綱目』(1596年)には「紅藍花」という名で紅花の花びらの薬効がまとめられ、現在も漢方薬として紅花散(こうかさん)、活血通経湯(かけつつうけいとう)、治頭瘡一方(ぢづそういつぽう)、補陽還五湯(ほうようかんごとう)などに配合されています。



提供：一般財団法人山形県理化学分析センター薬学博士 笠原義正氏



## 紅花の原産地

### 紅花はどこから来た



紅花が利用されるようになったのは、約4,500年ほど前から。紅花の野生種は中近東、中央アジア、アフリカに広く自生していますが、現在栽培されている品種の祖先は、イスラエルを中心に自生している「カルタムス・パレスチヌス」という種類だということが近年のDNAの解析結果から解明されています。紅花の起源地は中近東だというのが有力な説です。

### 紅花はシルクロードを通して

紅花はシルクロードを通して中国に伝わり、朝鮮半島経由で日本へ持ち込まれたとされています。この時、同時に染色技術も日本に入ってきたと考えられています。



### 日本へ伝来

3世紀の纏向遺跡(奈良県)から紅花の花粉が大量に発見されており、この頃には、日本に紅花が伝来していたと考えられています。また、6世紀後半の藤ノ木古墳(奈良県)の石棺内からも花粉が見つかっており、儀式に使われていたと考えられています。



### 山形の地で大きく花開く

山形には室町時代末期頃に伝わったといわれています。全国各地には、その頃に紅花が栽培されていたという記録があります。中でも山形は、紅花の栽培に適した気候、風土だったため栽培がとても盛んに行われるようになりました。



## 最上紅花の優位性



### 山形で育まれた品種「もがみべにばな」

世界各地の紅花のDNAを調べると、一つの種類からそれぞれの地域の地理的な条件にあわせて変異や選抜を重ね、その土地独自の紅花が育ってきたことが分かりました。日本で育つ紅花も、地域によって開花時期が異なります。

山形に伝えられた紅花は、この地の気象条件にあわせて独自に進化し、用途などにあわせ選抜されてきました。特に、山形で染色用として選抜されてきた在来の品種は、草丈が高く揃っており、手摘みしやすいことから収穫量が多い特徴がありました。その紅花を栽培し、染色用に加工した紅餅が江戸時代には「最上紅花」として京都で販売されました。

このように、山形に受け継がれてきた在来の紅花の中から、染色用・切り花用に向く品種として選抜したのが「もがみべにばな」です。

### 「最上紅花」が生まれた理由

紅餅としての「最上紅花」が質、量ともに日本一と称されるまでになったのには、山形を流れる最上川の存在が欠かせません。最上川流域には、紅花の栽培に適した土壌が広がっています。また、四方を山で囲まれた地形になっているので朝霧が出やすく、紅花の収穫に最適な条件になります。さらに、最上川で発達した舟運と、紅花商人の高い販売能力が、「最上紅花」の生産地と消費地を繋ぎました。

こうした条件と、山形の気象条件の中で選抜され、「もがみべにばな」のルーツとなった在来品種。これらのどれかひとつが欠けても、「最上紅花」の隆盛はなかったでしょう。

### 「最上紅花」と「もがみべにばな」

漢字の「最上紅花」は、江戸時代から山形で生産されていた紅花、紅餅の総称で、今でいう産地ブランド名のようなものです。一方、ひらがなの「もがみべにばな」は、山形県内で栽培されていた様々な紅花品種の中から選抜して昭和43年に山形県が登録した品種の名称です。

**COLUMN**

**紅花と自然の神秘**

毎年、夏至から数えて11日目の「半夏生（はんげしょう）」の頃に1輪だけ花を咲かせる紅花。この「半夏ひとつ咲き」を合図に次々と黄色の花が咲き出します。

最上紅花の優位性

最上川舟運の整備と紅花商人の活躍により、  
紅花の一大生産地に発展

古くは『古今和歌集』にも「最上川 のぼればくだる稲舟の いなにはあらず この月ばかり」と歌われた最上川。平安時代は、内陸で収穫された米が最上川を通じて出羽国府に運ばれていました。

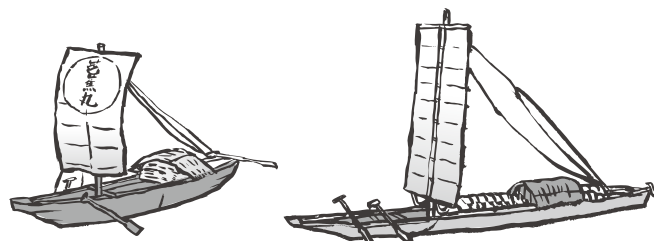
時は流れて江戸時代、山形城主・最上義光は最上川三難所の開削事業を行います。この事業により、山形と酒田が一貫して結ばれ、最上川舟運は重要な航路として発展していきます。

室町時代末期には山形の地で栽培されていたとされている紅花も、江戸時代中頃以降、気候風土が栽培に合っていたことや舟運の発達により、最上川流域で盛んに栽培されるようになります。享保年間(1716~1736)には、全国の出荷量1,020駄中、最上川流域では415駄を出荷していました。幕末の文久年間(1861~1864)には最盛期を迎え、舟運の中継地、大石田に集められた紅花は1,550駄に達したとの記録があります。1800年頃からの100年間は、「最上千駄」と言われるほどの日本一の紅花の産地となりました。

※1 「最上川を上り下りする稲を運ぶ舟だけでも、この月ばかりは農作業が忙しく、お逢いすることができません。嫌というわけではありません」という恋歌ですが、この時代から、最上川舟運が栄えていたということが分かります。

※2 1駄 120kg

【最上川舟運で使われた舟】

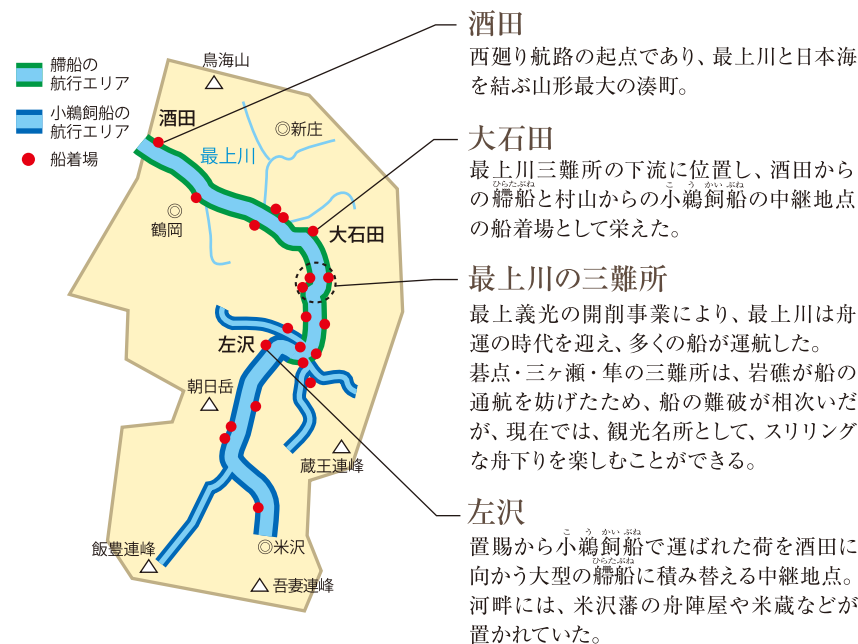


小鵜飼舟は2~3<sup>ト</sup>(米30俵分)、船船は20<sup>ト</sup>(米350俵)を積載する。

最上紅花の優位性

舟運で栄えた最上川の主な河岸・船着場

最上川上流の置賜地域から左沢や大石田などの船着き場までは、陸送するか、小型の小鵜飼舟に各村で収穫した紅花や米を積み、その後、大型の船船に積み替えて酒田へと運ばれました。



山居倉庫  
最上川沿岸の米の集積港として栄えた酒田のシンボル。(酒田市)



最上川の三難所  
流れが急で岩礁が出ていたりして、船頭たちに恐れられていた。(村山市)



大石田川舟役所跡大門  
寛政4(1792)年に置かれた幕府の舟役所。(大石田町)



小鵜飼舟押絵  
馬明治時代に左沢の舟乗りが船旅の安全を祈り、巨海院に納められた。(大江町)

最上紅花の優位性

山形と京の都を繋ぐ水の道

平安時代から日本の代表的な染料植物であった紅花。江戸時代中期になると、京都西陣織の染料として、京都から遠く離れた山形の「最上紅花」がたくさん使われていました。その背景には、比較的早い時期に最上川舟運が発達していたことに加え、1672年（寛文12年）に幕府の命を受けた河村瑞賢が確立した酒田と上方（京・大坂（大阪））を結ぶ海路「西廻り航路」の存在があります。

車や鉄道はまだない時代、大量の物資を江戸や大坂（大阪）に安全に運ぶには、水上輸送が欠かせませんでした。江戸幕府が出羽の年貢米を大量に届けるため整備させたのが、「西廻り航路」です。この航路は、山形（酒田）から日本海側を南下し、下関、瀬戸内海を経て大坂（大阪）や京都へ向かうルートです。紅花は西廻り航路を利用し、福井県敦賀で船から積み荷を降ろして、馬などに積み替えて琵琶湖まで運び、琵琶湖から小型船に積み替えて淀川経由で大坂（大阪）に入っていました。積み替える必要が無くなったことにより、費用も軽減され、一度に大量の物資が運べるようになりました。

山形と京都や大坂（大阪）が、川と海路による水の道によって深く結びつきました。北前船に乗り山形の紅餅を京都へ出荷し、帰りには京都で買い付けた品を持ち帰り、各地で広く商いを行なった紅花商人たち。水の道を行き来する商人の活躍により、山形は紅花の一大産地となっていったのです。



〈北前船の復元船(2分の1サイズ)〉

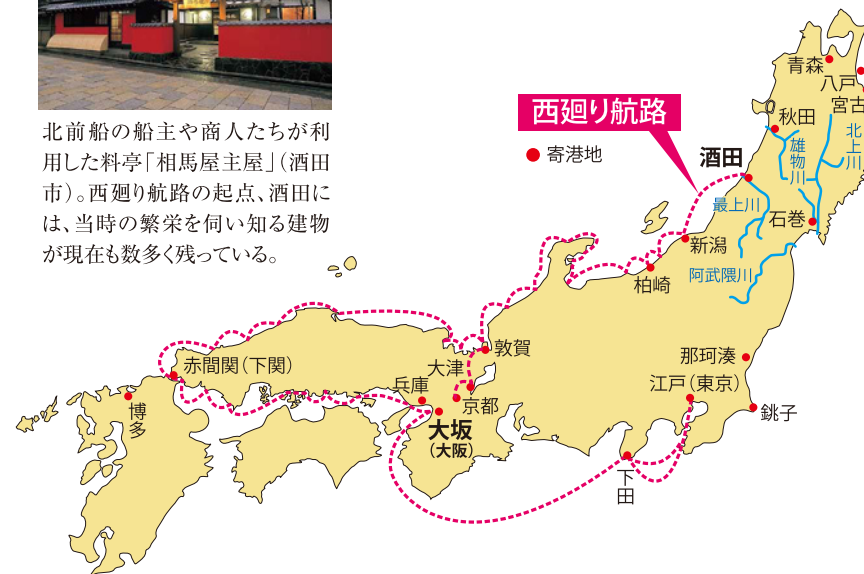


〈北前船航路と連結する船船〉

最上紅花の優位性



北前船の船主や商人たちが利用した料亭「相馬屋主屋」(酒田市)。西廻り航路の起点、酒田には、当時の繁栄を伺い知る建物が現在も数多く残っている。



北前船で繁栄した湊・酒田の様子が描かれている「酒田袖之浦・小屋之浜之図」。沖の方には北前船、手前の川には船船を見ることができる。

提供：公益財団法人本間美術館 所蔵

**COLUMN**

**西廻り航路で活躍した北前船**

船主が商品を買付けて寄港地で売りさばく「買積み方式」が特徴だった北前船。酒田から紅花・米・大豆・青芋を積み京都へ。帰りは塩や魚、お茶、雛人形、仏像などを積み込んでいました。



## 栄華をいまに伝える紅花屏風

①左半双の図



第3景

第2景

第1景

●紅花屏風:㊦長谷川コレクション・山寺芭蕉記念館 所蔵

山寺芭蕉記念館(山形市)所蔵の六曲一双の屏風。紅花の生産から出荷、北前船での輸送、京都の紅花問屋の様子が描かれています。描いたのは、絵師青山永耕\*。のちに狩野永耕応信と改名。

\*青山永耕:出羽村山郡太田村(現東根市)出身1817(文化14年)~1879(明治12年)没

### 紅花問屋での作業と輸送の様子



〔①左半双 第1景〕

紅花問屋で行われている荷造りの景。問屋の主人が庭先に出張って采配する中、荷造りや屋号の書き入れ、荷運びなどの作業が黙々と進められている。



〔①左半双 第2景〕

海路搬送の場合、大石田で船積みされた紅花は、酒田で海船に積み替えられ、西廻り航路で敦賀の港まで運ばれた。



〔①左半双 第3景〕

敦賀を経て京に運ばれた紅花の荷。描かれているのは、京都の紅花問屋美濃屋と推定され2階座敷の景は、荷主と商談している様子。

## 栄華をいまに伝える紅花屏風

②右半双の図



第3景

第2景

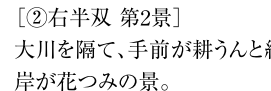
第1景

### 紅花の生産と紅餅加工の様子



〔②右半双 第1景〕

豊作を祈る春祭りの景。農家の庭先でお祝いのもちつきが行われ、道端でたこあげをする子供の姿があり、桜が満開。いよいよ農作業が始まるころ。左端に問屋筋の商人と思わしき編笠姿の旅人が描かれている。



〔②右半双 第2景〕

大川を隔て、手前が耕うんと紅花の播種の景で、向こう岸が花つみの景。



〔②右半双 第3景〕

紅餅に作り上げられるまでの工程が、水洗い、花踏み、花寝せ、餅丸め、餅踏み、餅乾しの作業に区分して詳しく描かれている。



### 山形美術館(山形市)でも六曲一双の紅花屏風を所蔵

江戸時代に紅花商人として活躍した㊦長谷川家が収集したもので、絵師横山華山の作品。

## 最上紅花と隆盛



紅の蔵(山形市)

### 紅花交易により伝わった蔵文化

江戸時代に紅花で財を成した豪商の蔵屋敷を、現代でも各地で目にすることができます。紅花交易により、京都や大阪、江戸との交流が生まれ、白壁土蔵の店蔵が立ち並ぶ町並みが形成されました。

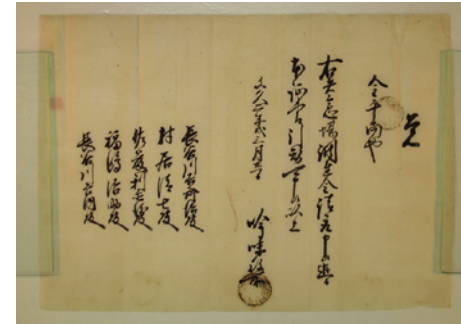


新庄まつりの山車行事

### 「最上紅花」がもたらした華やかな上方文化

酒田山王祭や新庄まつりでは、色鮮やかな山車が練り歩き、お囃子が祭りを盛り上げます。他にも、谷地八幡宮の例大祭などに山車やお囃子が登場します。江戸時代に紅花商人が上方を行き来し、見聞きした京都祇園祭りなどに影響を色濃く受けているのではないかと考えられています。

## 最上紅花と隆盛



貸し付け証文(文久2年:佐藤利兵衛氏 所蔵)

### 藩の財政をも助けた紅花商人

最盛期には全国の紅花生産量の約半量を占め、山形の紅花商人は多大な利益を手にしました。財産を築き、豪商と呼ばれるようになった者の中には、藩より御用商人としての特権を与えら

れるかわりに、藩の苦しい財政を支えるために御用金を調達しなければなりません。紅花商人が領主に金千両\*を貸し付けたとの記録が残ることからも、「最上紅花」がもたらした富の大きさがうかがえます。

\*金千両(現在の価値に換算):江戸時代中～後期は、4千万円～6千万円。



芭蕉、清風歴史資料館(尾花沢市)

尾花沢の鈴木清風は、紅花の流通や貸金業で巨額の富を築き「紅花大尽」と呼ばれました。江戸や京都・大阪を往来し、俳諧をたしなみ、松尾芭蕉とも親交がありました。尾花沢の清風宅に滞在したときの様子は『おくのほそ道』にも描かれています。

芭蕉、清風歴史資料館は、清風宅の隣に、旧丸屋・鈴木弥兵衛家の店舗及び母屋を移転復元したもので、江戸時代の町屋の姿とともに清風にまつわる資料も見ることができます。

## 紅花の価値



画像提供:伊勢半本店  
撮影:外山亮一

### 紅の価値は「米の百倍・金の十倍」

山形では7月には、紅花畑の辺り一面が黄色に染まります。咲いている紅花に含まれる色素のうち、黄色がほとんどで、赤い色はたった0.5%しかありません。紅餅に加工してやっと1%になりますが、着物や化粧品などに用いられる紅色は、希少な赤い色の天然色素を抽出したもののなのです。

江戸時代の紅花は、より赤い色の色素を高め保存性も良くした「紅餅」という形で、京都や大坂(大阪)などへ運ばれていきました。この「紅餅」の1枚は、「紅花1匁」と言われ、わずか3.75g(1匁)しかありません。当時の「紅餅」の価格は1駄(120kg)で米が100俵買えるほどで「米の百倍、金の十倍」と謳われるほどの貴重な品でした。

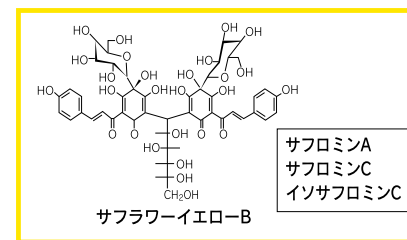
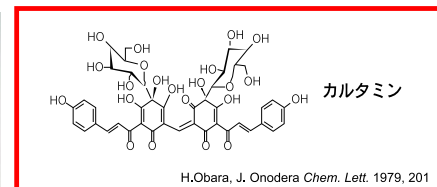
## 紅花の色素成分

紅花の花びらに含まれる色素は、黄色の色素がほとんどで、赤色の色素が0.5%とされています。

- 黄色の成分は、『サフラワーイエローB』で、水溶性(水に溶けやすい性質)のため、簡単に色素が取り出せます。
- 赤色の成分は、『カルタミン』で、水に溶けにくく、色素を効率よく取り出すために様々な技法が工夫されてきました。染色時もアルカリ性と酸性の液体を使い、手間がかかりますが、紅花から抽出した「紅(あか)」は、発色が非常に良く、高級素材の染色や口紅に使われてきました。

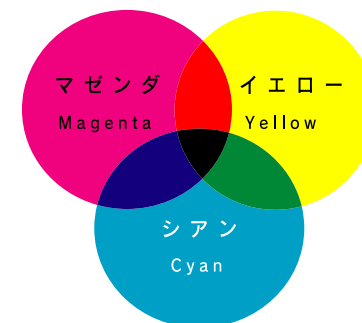


赤色色素  
(非水溶性)



黄色色素  
(水溶性)

- 植物染料の藍の青色成分は『インジゴ』。紅花の赤色と黄色と藍で三原色の全てが揃い、どのような色でも発色が可能。平安時代にも紫色系の二藍という色名が使われており、これは、藍と紅花で重ね染めたもの。また、藍と紅花の黄で緑色系の色を発色させることもできます。



## 紅と日本人

### 日本人と紅の関わり

赤は生命を象徴する色として古くから呪術的、祭祀的な意味合いを持っていました。江戸時代は疱瘡などの感染症が大流行すると、紅一色で摺られた「疱瘡絵」が飛ぶように売れ、人々は病気が治ると家の中に貼っていたそうです。

人生の節目に行われる「初宮参り」「七五三」「婚礼」などの儀式では紅が使われ、健やかな成長を願いました。「還暦」の時に赤色の衣服を贈るのは、かつて魔除けの意味で産着に紅が使われていたことに由来し、「生まれた時に還る=新たな人生をスタートする」という意味が込められています。遠い昔から、赤、そして紅(真紅)は日本人の生活に根付いてきたのです。



初宮参り



七五三



婚礼



還暦

画像提供:伊勢半本店  
撮影:外山亮一

#### COLUMN

#### 貴族しか身に着けられなかった憧れの色

平安時代の高貴な貴族しか身に着けられなかった憧れの色、紅花で染色された着物は灰で洗濯すると色が落ちたり、日に当てると退色する性質がありました。色落ちしやすいうえに、栽培にも手間がかかり、染色法も難しく、非常に高価で貴重なものとされており、平安時代には紅花の濃い紅色は高い位の人にしか着用は許されませんでした。

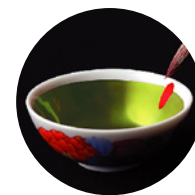
## 紅と日本人

「化粧」が一般化してきたのは江戸時代後期。宮中行事だった五節句(人日(七草の節句)、上巳(雛祭、桃の節句)、端午(菖蒲の節句)、七夕(星まつり)、重陽(菊の節句))が、江戸庶民の文化として広まった時期と重なります。宮廷に仕える官女たちが化粧をしていたことが庶民の憧れにつながったのかもしれませんが、そして、それまで紅の製造は京都が中心でしたが、江戸にも「紅屋」が出現したことで、女性たちの間に化粧の習慣が広がっていきました。

江戸時代の口紅は、紅花の花びらに含まれる0.5%の赤い色の色素のみで作られていたので、大変高価なものでした。当時は、口紅を唇全体に塗るのではなく、小さく塗るのが普通でした。浮世絵などに描かれた女性たちは皆、小さな唇をしています。しかし、江戸時代の文化・文政のころに、下唇にたっぷり口紅を塗る方法が流行します。紅花の紅は、塗り重ねると玉虫色に輝くという特徴があり、笹色紅と呼ばれていました。高価な紅を塗り重ねることができない庶民の女性達は工夫を凝らし、紅を塗る前に「墨」を塗り、その上に紅を重ねて、笹紅色を再現していました。浮世絵の中には緑に近い色の唇をした女性が描かれていることもあります。



「模擬六佳撰 小野小町」・溪斎英泉 画  
伊勢半本店 紅ミュージアム蔵



画像提供:伊勢半本店

「小町紅」という名で売り出された紅は、一さし分が三十文(現在の貨幣価値で500円程度)であったといわれています。お猪口や皿などに紅を刷かれた状態で市販されていました。

#### COLUMN

#### 日本で唯一、伝統製法を受け継ぐ

現在も江戸時代から変わらない伝統製法で「小町紅」を作り続ける「伊勢半本店」。昔は猪口の内側にのばした紅を水で溶きながら、紅筆で色を重ねていきました。「小町紅」は猪口ひとつ分に、約1,000輪の紅花の花びらが必要だそうです。良質な紅餅から作られる口紅は油分がないのでさらりとした点け心地です。